

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：14503  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2014～2016  
課題番号：26381320  
研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム児・者における包括的・生涯的支援プログラムの地域モデルの開発

研究課題名(英文) Development of the community model of the comprehensive and lifelong support program for children with autism spectrum disorder

研究代表者  
井澤 信三 (Shinzo, ISAWA)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：50324950

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：自閉症スペクトラム児・者に対する包括的・生涯的支援プログラムの地域モデルとして、一次的支援：家庭・学校等における直接的支援、二次的支援：地域の支援リソースによる直接的(本人)・間接的支援(教員・家族等)、三次的支援：三次的な専門機関による支援(レベル1：グループを対象とした社会的コミュニケーション等の中核的領域への直接的支援、レベル2：個別的な発達の課題に応じた個別的な直接的支援、レベル3：教員・家族等への間接的支援)といった階層性が考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study consisted mainly of the following three studies to develop the community model of comprehensive and lifelong support programs in children with autism spectrum disorder (ASD), (1) Study on research trends of behavioral interventions for children with ASD, (2) Case studies on long-term contents change of behavioral interventions for children with ASD, and (3) Examination of development examples of support program services to children with ASD in the community. These three studies suggested the need for hierarchy of support as the community model of support program for children with ASD, such as primary direct support in the homes and schools., secondary direct and indirect support by the community support resources., tertiary direct and indirect support by the tertiary specialized agencies; direct support for groups to core areas of ASD such as social communication, individual direct support to individual developmental tasks, and indirect support to school / family members.

研究分野：発達障害臨床心理学

キーワード：自閉症スペクトラム 支援プログラム 包括的 生涯的 地域モデル

## 1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム (Autism Spectrum Disorder ; 以下、ASD と略記する) 児・者に対する支援プログラムは多く開発、提案されている。たとえば、佐藤・涌井・小澤(2007)は、(1)機軸反応治療プログラム (PRT : Pivotal Response Treatments)、(2)UCLA 幼児自閉症プロジェクト (UCLA Young Autism Project)、(3)TEACCH プログラム (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children)、(4)発達・個人差・関係を基盤にしたプログラム (DIR: The Developmental, Individual-difference, relationship-based model) といった ASD 児に対する 4 つの代表的な支援プログラムが紹介している。また、山本・澁谷(2009)は、応用行動分析的な支援パッケージ「STAR プログラム (Arick, Loos, Falco, & Krug, 2004)」を紹介している。

それらの支援プログラムに「生活年齢段階 (例: 幼児期・学童期・青年期・成人期)」といった視点を加えた支援プログラムも開発、提案されている。たとえば、「前言語コミュニケーションズ獲得に及ぼす早期発達支援プログラム (Matsuzaki & Yamamoto, 2012)」などが挙げられる。

このような支援プログラムでは、ASD の障害特性に鑑み、それに対応したエビデンスを伴った支援プログラムであることが指摘されている (佐藤・涌井・小澤, 2007)。また、支援プログラムを生活年齢毎に区切っていくこと、また発達の領域に区切っていくこと、さらにはそれを組み合わせたもの (例: 幼児期におけるコミュニケーション支援など) は、エビデンスに基づく支援プログラムの特徴であり、目的も明確である。

しかし一方で、地域において支援プログラムを活用、展開することを現実的に検討した場合、年齢段階を細かく区切らずに、滑らかに (スムーズに) つながりを持つ支援プログラムが必要であろう。かつ、必要となる発達の領域を整理・統合した階層性のある支援プログラムを作成し、実行できる地域システム体制を構築していく必要性もあると考える。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえて、本研究では、ASD のある児・者に対する支援プログラムの地域モデル開発にあたり、以下の 5 つの視点に基づいて検討することを目的とした。

- (1) 地域におけるモデル的な支援プログラムを開発するにあたり、ASD 児・者の行動障害の予防、および中核的な特性に関する発達支援プログラムを開発すること ASD 児・者の障害特性に基づき、必須となる (「軸」となる) 基本メニュー (ミニマム・エッセンス) と選択メニュー (オプション・メニュー) について検討すること
- (2) (2) に基づき、それを幼児期～青年・成人

期にわたる生涯的な地域支援プログラムとして検討すること

- (3) (2) と (3) について、ある市 (地域) をモデルとし、包括的・生涯的支援プログラムの適用モデルを開発すること
- (4) 地域モデルを開発するにあたり、直接的支援 (例: ソーシャルスキル・トレーニングなど) と間接的支援 (例: ペアレント・トレーニング、コンサルテーションなど) の組合せを検討すること

## 3. 研究の方法

上記の目標を達成するために、以下の 5 つの研究を構成し、実施した。

- (1) 研究 : ASD 児における介入研究の動向の検討 : ASD 児における行動的介入研究を中心にレビューを行い、その動向を検討した。

- (2) 研究 : ASD 児における地域モデル開発に向けた行動的介入の内容の検討

ASD 児への大学附属臨床機関における行動的介入内容の経年的な変化に関する事例的検討 : 大学附属臨床機関において行動的介入を継続的に実施してきた ASD 児 4 名の経年的な介入内容を整理検討した。

ASD 児における行動的介入による支援プログラムの地域モデル案の検討 : 研究と研究における総括をした。

- (3) 研究 : ASD 児・者に対する地域における支援サービスの展開例  
明石市立発達支援センターとの連携事業 "Trial" の取組 : 地域における ASD 児に対する行動的介入の展開例を事例検討した。

ひょうご発達障害者支援センタークローバー加西ランチによる「ひきこもりの状態にある発達障害者の家族支援プログラム」: アセスメント、個別介入及び集団的介入のプログラムを開発した。

井澤信三・岡村章司研究室主催による「特別支援学校教員を対象としたスタッフ・トレーニング」の取組 : 特別支援学校の若手の教員 12 名を対象とし、応用行動分析に関する基本的な知識について、演習を含めた学習会を実施し、アンケートにより効果と課題を検討した。

NPO 法人ピュアコスモ (ひょうご高機能広汎性発達障害児・者・親の会) との当事者及び保護者のための連続講座 : 高校生以上の ASD 当事者 18 名、及びその保護者 24 名を対象とした 5 回連続の講座を実施した。当事者には、就労に向けた基本的な知識の学習会、職場を想定したシミュレーション型による SST、個別カウンセリングを 3 つのプログラムを提供した。保護者へのプログラムは、「(1 回目) 就労の現状と支援のポイント」「(2 回目) 発達障害者の雇用の現状を知ろう」「(3 回目) 就労支援を知ろう (ジョブコ

ーチの仕事)」「(4回目)先輩保護者による就活・就職の体験談から学ぼう」「(5回目)就労に向けた問題解決に向けた方法を知ろう」から構成された。レクチャー及びグループワークを含めながら実施した。

#### 4. 研究成果

(1)研究 : 最近の行動的介入研究のレビュー研究を概観し、ASD 児への「全般的な介入」「ソーシャルスキルズ」「行動問題」を取り上げ、そこから見えてくる介入アプローチの動向を検討した。

「全般的な介入」では、ASD 児には「社会性」「コミュニケーション」「アカデミック」「遊び」「運動」「身辺自立」「行動問題」、加えて「職業」や「機能的ライフスキル」などが標的スキルとして必要であることが示唆され、それは ASD 児への介入では包括的な視点を持つことの重要性が指摘される。また、応用行動分析(例:プロンプト法、強化法+先行子操作、分化強化、ビデオ・モデリングなど)をベースにした技法が最もエビデンスとしては支持されるが、単独の技法を適用するというよりも、いくつかの技法の組み合わせた介入が増加していることも特徴である。この動向は、「自閉症は、ある一つの場面や状況で学習したスキルを訓練で使用されていない場面や状況へ転移することが難しい。かつ、時間的にスキルを維持することが難しい」といった般化と維持の困難性と強く関係している。

「ソーシャルスキルズ」については、ASD 児の中核的な障害と考えられる社会性へのアプローチとして効果のインパクトは若干低く、研究としても「何を教えるべきか」といったアセスメントの研究が不足しているといった課題が示されており、今後、さらに指導研究の蓄積が求められる。

「行動問題」について、行動問題への介入研究では、基本的には FBA (Functional Behavior Assessment) をベースにした指導・支援が効果を示している。しかし、FBA を実施しなくても効果を示す介入方法(例:ソーシャルストーリーズなど)は、行動問題の機能に基づくのではなく、一般的に望ましい行動を促進する方法になっている可能性がある。学校現場では、簡易な FBA と実行可能性の高い技法が組み合わせられた介入の提供が求められる。

(2)研究 : 課題内容を整理するために、「基本的な生活スキル」「認知スキル」「プレアカデミック・アカデミックスキル」「言語コミュニケーションスキル」「社会的スキル」「遊び・余暇スキル」「運動スキル」「職業スキル」「行動問題への対応」の9つの大カテゴリーに分類した。

さらに、研究 と研究 における総括を下の Figure にまとめた。学校や家庭など、生

活の多くの時間を過ごす場所におけるナチュラルな指導・支援(的な関わり)は、一次的な「学校における発達全般の促進」につながる指導・支援の場となる。また、本人への直接的な支援だけでなく、間接的な支援も地域支援システムとして用意されていることが求められる。一方、「学校場面外における特化した発達領域への介入」が二次的に用意されることで、手厚い地域支援システムにつながっていくであろう。その際、学校等では十分には満たされない ASD の発達領域における包括的な視点が必要であること、前述したように(第1次的)グループを対象とした支援プログラム → (第2次的)行動障害支援、問題に対応した個別介入といった階層が想定される。

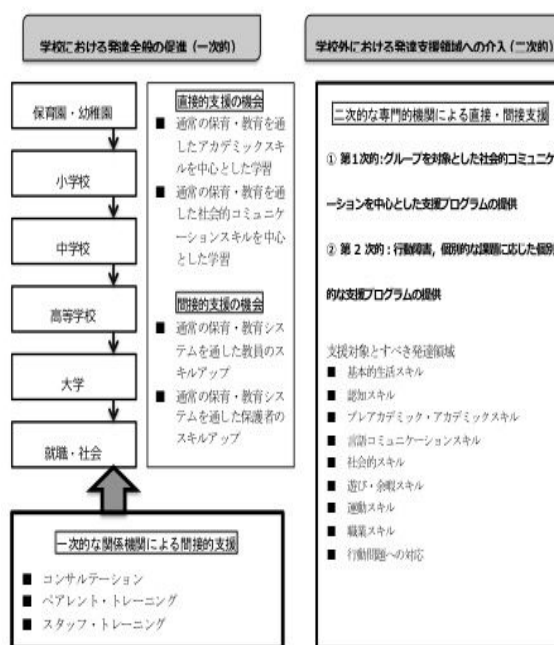


Figure ASD 児における行動的介入による支援プログラムの地域モデル案

#### (3)研究

明石市立発達支援センターとの連携事業：連携事業の一つとして、“Trial”を実施してきた。“Trial”は、研究室の博士課程在籍者が中心メンバーとなり、明石市立発達支援センターとの連携のもと、療育希望者を募り、参加した対象児とその保護者への指導・支援を展開すること、または、研究室の研究ニーズを説明し、同意を得た上で、研究プロジェクトに対象児として参加いただくといった形式であった。隔週程度(日曜日)のペースで実施してきた。「小集団プログラムによる検討(主に、研究ニーズに対応した参加募集タイプ2件)」と「個別事例による検討(主に、個に応じた個別課題の実施タイプ7件)」の内容について、その効果

を検討した。おおむねその効果は良好であり、地域における支援サービス展開例においてエビデンスを蓄積していくことの重要性が示唆される。

発達障害者支援センターによる「ひきこもりの状態にある発達障害者の家族支援プログラム」：ひきこもりの状態にある発達障害者の家族（9家族12名）へのアプローチとして、当該家族に対する個別セッション及び集団プログラムの併用による介入アプローチの効果と課題を検証した。その結果、効果検証については、事前・事後による保護者評価による尺度変化（SRS-18、日本版GHQ-28、HBCLなど）及び家庭におけるエピソード・データをもとに、おおむね良好な効果が示された。一方で「ひきこもりの状態」や「保護者の特性や状態」によって、効果が異なる結果もあり、保護者に応じた個別的なセッションの工夫が必要とされる。井澤信三・岡村章司研究室主催による「特別支援学校教員を対象としたスタッフ・トレーニング」の取組：参加者及びスタッフによる事後アンケートの記述について、全ての参加者が今回の研修については良好な評価をしている。今後とも継続していくことが求められるが、その際には、どのような研究内容が必要か、どのような研修方法が効果的かといった本格的な検証が求められる。

NPO法人ピュアコスモ（ひょうご高機能広汎性発達障害児・者・親の会）との当事者及び保護者のための連続講座：保護者においては事前・事後における尺度評価（自己効力感尺度等）事後アンケートを実施した。また、当事者には、行動的データの収集、及び事後アンケートを実施した。結果はおおむね良好であった。

一次 的 【直接的支援】 家庭、学校等（その場で実施される一般的な指導・支援的なアプローチ）

二次 的 【直接的支援】 地域における支援リソースによるアプローチ（本人）

→ 公立教育センター、発達支援センターなど

【間接的支援】 地域における支援リソースによるアプローチ（教員・家族等）

→ 特別支援学校センター的機能、発達支援センターなど

三次 的 【直接的・間接的支援】 大学附属臨床機関等を含む三次的な専門機関

レベル1：グループを対象とした社会的コミュニケーション等の中心領域への支援プログラムの提供

→ 明石市立発達支援センターとの連携事業「Trial」における小集団プログラム

→ NPO法人ピュアコスモとの連携事業「高機能ASD当事者とその保護者のための連続講座」

レベル2：個別的な発達の課題に応じた個別的な支援プログラムの提供

→ 大学附属臨床機関における行動的介入の実践

→ 明石市立発達支援センターとの連携事業「Trial」における個別的な行動的介入

レベル3：教員・家族等への間接的な支援プログラムの提供

→ 発達障害者支援センターによる家族サポートプログラム

→ 研究室主催による特別支援学校教員を対象とした研修プログラム

（ASDの発達的な包括性を保障するための支援すべき発達領域）

- 基本的な生活スキル
- 認知スキル
- プレアカデミック・アカデミックスキル
- 言語コミュニケーションスキル
- 社会的スキル
- 遊び・余暇スキル
- 運動スキル
- 職業スキル
- 行動問題への対応

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計14件）

（査読あり）

山本多佳実・井澤信三(2016)：自閉症スペクトラムのある青年における外食場面のソーシャルスキル獲得と一般化の検討-シミュレーション訓練とセルフマネジメント手続きを組み合わせた指導の効果-。特殊教育学研究, 54(2), 179-187.

井上和久・井澤信三(2016)：小学校知的障害特別支援学級の教育課程編成の調査研究-各教科等を含めた指導の時間割への位置づけとその効果から-。発達障害研究, 38(3), 341-350.

池田浩之・井澤信三(2015)：高機能自閉症スペクトラムのある者における継続就労に関する検討-心理・精神的状態を観点として-。児童青年精神医学とその近接領域, 56(5), pp.801-808.

井上和久・井澤信三(2015)：特別支援学校のセンター的機能を活用した早期支援と関係機関との連携の実態：全国の特別支援学校への質問紙調査結果の分析から。小児保健研究, 74(5), pp.685-691.

岡本邦広・井澤信三(2014)：行動問題を示す発達障害児をもつ母親と教師の協働的アプローチにおける協議ツールの効果と支援行動の維持の検討。特殊教育学研究, 52(2), pp.115-125.

井上和久・井澤信三・井上とも子(2014)：特別支援教育のセンター的機能を活用した発達障害児等への早期支援に係る実態調査-保健機関、療育機関との連携・協働の状況について-。LD研究, 23(3), pp.331-339.

（査読なし）

井澤信三・山本真也・山本多佳実(2017)：自閉症スペクトラム児における行動的介入内容の経年的な変化の事例的検討。兵庫教育大学研究紀要, 50, pp.29-36.

井澤信三(2016)：自閉症スペクトラム障害児への介入研究の動向。発達障害研究, 38(1), pp.14-19.

井上和久・井澤信三(2016)：小学校知的障害特別支援学級の教育課程に関する実態調査-自立活動の時間割への位置づけとその効果から-。大和大学研究紀要, 2, pp.73-78.

井上和久・井澤信三・大久保圭子(2015)：特別支援学校のセンター的機能を活用した特別な支援が必要な就学前の子どもへの相談支援の取組-特別支援学校12校への面接調査から-。大和大学研究紀要, 1, pp.59-68.

野上美樹・小島道生・井澤信三(2015)：

自閉スペクトラム症児の親の自己成長感と障害受容. 発達障害支援システム学会, 14(2), pp.69-78.

市川哲・井澤信三・岡村章司(2015): 自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の対処資源が将来志向コーピングに及ぼす影響. 兵庫教育大学学校教育学研究, 28, pp.63-71.

平本厚美・井上雅彦・井澤信三(2015): Rett 症候群の指さし理解と選択行動に関する研究. 発達心理臨床研究, 21, pp.71-79. (兵庫教育大学附属発達心理臨床研究センター).

井澤信三(2014): 特別支援教育における発達障害のある児童生徒へのアプローチ. デイケア実践研究, 17(2), pp.58-63. (日本デイケア実践学会).

〔学会発表〕(計 18 件)  
(国際学会)

Isawa, S. (2017). Behavioral Intervention to Bring the Completing Tasks to a Student With Autism Spectrum Disorder. 11th Annual Autism Conference. (Puerto Rico).

Yamamoto, S., & Isawa, S. (2017). The Effect of Behavioral Social Skills Training on Social Skills Related to Employment by an Autistic Adolescent. 11th Annual Autism Conference. (Puerto Rico).

Yamamoto, S., & Isawa, S. (2015). The effects of a script-fading procedure to promote reply behaviors and novel behaviors in social interaction among children with autism. ABAI Eighth International Conference. (Kyoto).

(国内学会)

山本真也・古田湧也・山本多佳実・東川博昭・井澤信三(2016): 自閉症児における「他者からの挑発」に対する対処行動の指導. 日本特殊教育学会第 54 回大会(新潟大学).

山本多佳実・古田湧也・山本真也・東川博昭・井澤信三(2016): 家庭での歯磨き時に行動問題を示す知的障害児における母親によるトークンエコノミー法適用への支援. 日本特殊教育学会第 54 回年次大会(新潟大学).

八木絵梨奈・井澤信三(2016): 知的障害特別支援学校高等部における軽度知的障害のある生徒に必要な指導内容の検討. 日本特殊教育学会第 54 回年次大会(新潟大学).

原康行・井澤信三(2016): 特別支援学校における授業コンサルテーションの有効性と教師自己効力感との関係の検討. 日本特殊教育学会第 54 回年次大会(新潟大学).

山本多佳実・井澤信三(2016): 高機能自閉症スペクトラムのある高校生における「朝の準備行動」の指導研究. 日本行動分析学会第 34 回年次大会(大阪市立大学).

山本真也・山本多佳実・井澤信三(2015): 自閉症スペクトラム障害児におけるなぞなぞ回答行動を促進する手続きの検討. 日本行動分析学会第 33 回年次大会(明星大学).

山本真也・井澤信三(2015): 自閉症スペクトラム幼児に対する就学準備支援プログラムの効果の検討. 日本特殊教育学会第 53 回大会(東北大学).

井上和久・井澤信三(2015): 特別支援学級の教育課程の編成に関する実態調査-小学校知的障害特別支援学級の領域・教科を合わせた指導の時間割編成と効果について-. 日本特殊教育学会第 53 回大会(東北大学).

山本真也・石田多佳実・井澤信三(2014): 知的障害児におけるボールを投げる行動と捕る行動に対する介入効果の検討. 日本行動分析学会第 32 回年次大会(弘前大学).

石田多佳実・井澤信三(2014): 自閉症生徒における携帯電話での応答スキル獲得と般化の検討. 日本行動分析学会第 32 回大会(弘前大学).

山本真也・石田多佳実・山口綾乃・横田和樹・東川博昭・井澤信三(2014): 自閉症スペクトラム障害児の話し合い行動の獲得にスクリプトフェイディングとトークンエコノミーが与える効果. 日本特殊教育学会第 52 回大会(高知大学).

石田多佳実・横田和樹・山口綾乃・東川博昭・山本真也・井澤信三(2014): 高機能広汎性発達障害者における「相互性を高める会話スキル」の指導に関する研究. 日本特殊教育学会第 52 回年次大会(高知大学).

池島千恵美・井澤信三(2014): 自閉症児における「話しかけ方・終わり方」スキルの指導. 日本特殊教育学会第 52 回大会(高知大学).

井上和久・井澤信三・後上鐵夫(2014): 特別支援学校のセンター的機能を活用した早期支援~来校による相談, 保育所・幼稚園への巡回相談の状況について~. 日本特殊教育学会第 52 回大会(高知大学).

稲葉綾乃・井澤信三(2014): 成人期に診断を受けた高機能広汎性発達障害者の相談支援の分析~自己理解に関する発話内容の経過~. 日本特殊教育学会第 52 回大会(高知大学).

〔図書〕(計 5 件)

井澤信三(2016). 「発達障害事典(日本LD学会編)」。丸善出版. 編集委員・

分担執筆「一事例の実験デザイン」「一般化と維持」.

井澤信三(2016). 「発達障害支援ハンドブック(下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳編著)」. 金剛出版. 分担執筆「通常学級における発達障害のある児童の指導と課題」.

井澤信三(2016). 「発達障害の人の転職ノート(石井京子・池嶋貫二・林哲也編著)」. 弘文堂. コラム「就業時における合理的配慮」.

井澤信三(2016). 「発達障害研究と実践のための医学診断/福祉サービス/特別支援教育/就労支援(日本発達障害学会監修)」. 福村出版. 分担執筆「発達障害児のストレスマネジメント」.

井澤信三(2015). 「ケースで学ぶ行動分析学による問題解決(日本行動分析学会編)」. 金剛出版. 分担執筆「第11章 発達障害:青年」.

井澤信三(2015). 「改訂新版 特別支援教育総論(柘植雅義・木船憲幸編著)」. 放送大学教材(放送大学教育振興会). 分担執筆「情緒障害教育」「自閉症教育」

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井澤 信三 ( ISAWA, Shinzo )  
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授  
研究者番号: 50324950

### (2) 研究分担者

岡村 章司 ( OKAMURA, Shoji )  
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・准教授  
研究者番号: 00610346